

『夜の寢覚』の「あえか」な寢覚の上造型

——「なびく」と夕顔・浮舟・女三の宮の関係をめぐって——

池田 彩音

一 「心強し」を体現する行為と「あえか」

『夜の寢覚』の寢覚の上は、「心強し」がその成長を示す語として取り上げられることが多い。鈴木一雄氏は、寢覚の上の魅力について、次のように端的に記述している。

「心強く」事を処するといつても、あらわに自らの意志を表に立てるわけではない。意志の強さは「あえか」「なつかしさ」に包まれ、少女時代そのままの天真爛漫の奥に秘められている。いわば、天真爛漫と成熟の共存、「なつかしさ」と「心強さ」の兼ね合いにこの人の魅力があるようである。^①

「あえか」「なつかしさ」は、確かに男性を惹きつける魅力である。しかし、それは女性側が意図しない場合においても男性との関係を生み出してしまふような、危うい性質でもある。寢覚の上は、そのような自らの性質ゆえに何度も危機に接している人物とも言える。一方で、そのような性質には似合わない「心強さ」が際立ってくるのである。

寢覚の上は、男君や帝など、男性から見ても「あえか」と評価されることが多い。しかしながら、他者の視線を通して語られる女君の姿は、女君の本来の性質や、その内面までを表わしているとは限らない。それを探るには、女君の意志が反映された結果としての行為を見ることが必要である。それでは、寢覚の上の内面の「心強さ」を体現する行為とはど

のようなものであろうか。

物語第三部において、寢覚の上は継娘の督の君の入内に付き添い、宮中に参内する。そこで、帝の母である大皇の宮の企みによって、帝にかき口説かれる。大皇の宮は、次のように計画の成功を確信していた。

「上の御有様を見ぬかぎりこそあれ、かばかり、限りなうなまめかし、艶にいみじくおはしますを、見たてまつりだにそめては、え心強からじ。かならず思ひ靡きたてまつりて、かの大皇の方さまは、思ひ退く心つきなむ」
（『夜の寢覚』巻三・二六七頁）^②

しかし、寢覚の上は帝を拒み通す。計画の失敗を大皇の宮に話す帝の言葉には、次のように寢覚の上の「心強」い態度が語られている。

見る目、もてなしの、さばかりなまめき、あえかなるほどよりは、いとものはしたなく、心強きほどにぞはべりける。

（『夜の寢覚』巻三・二九六頁）

ここでは、寢覚の上の外見の「なまめき、あえか」な様子は、「心強」い帝への拒否の態度とそぐわないものとして捉えられている。大皇の宮は、寢覚の上が帝の様子を見れば、「心強」くはいられず、「かならず思ひ靡」くだろうと思っていた。それに対し、寢覚の上は「心強」く、帝に靡かなかつたのである。

大皇の宮付きの女房から帝が寢覚の上に言い寄ったと聞かされた男君は、「人には殊に、げにさもや、うち思ひ、靡きたてまつりぬらむ」（『夜

の寢覚』卷三・二九八頁」と、寢覚の上が帝に靡いたのではないかと疑い、嫉妬する。この後、男君は寢覚の上が帝を拒み通したと知り、寢覚の上は男君を頼って宮中を逃れ出る。しかし、男君は執着する帝から寢覚の上宛に届いた手紙を見て、次のように思う。

まいて、いとかかる御気色を見知り、思ひ靡かざらむ人は、心なく口惜しくさへあべきを、今も昔に変はることなく、いと若やかにおぼどかに、たをたをとあるもてなし、気色ぞ、いとあえかなれど、ものを見知り、思ひ分くまじうはあらぬ人にて、『ただ人の、思ひ定めたるかたあるにあらはれてあらむよりは、あまたが中に、限りなくおぼしときめかされたらむを、いと后には及ばずとも、それをこの世の思ひ出でにしてむを』と思はぬやうはあらじを、……かばかりの御気色を、心強う、さばかりもて離れしに、名残なく我が陰に立ち隠れて、のがれ出でたる心ばへ、いとありがたく、我が方さまのあはれは類なく思ひ知らるものから、かくてのみ逢はざらむほどは、さりととも、うち見て涙ぐまるる節々もありなむかし。

〔夜の寢覚』卷四・三五五—三五六頁〕

男君は、帝からこれほど心を掛けられていて、「思ひ靡かざらむ人」は、情けがなく残念でさえあると言い、寢覚の上の昔からの印象を挙げつつ、思慮分別がある人で、点線部「心強う、さばかりもて離れしに、」と、男君を頼って寢覚の上が帝のもとを逃れ出たことを認める。しかしながら、このように逢わずにばかりいる間は、帝からの手紙に涙ぐむ折もあるであらうと思ひ、寢覚の上が心の内では帝に惹かれているのではないかと疑う。

ここで注目するのは、傍線部「いと若やかにおぼどかに、たをたをとあるもてなし、気色ぞ、いとあえかなれど」と、寢覚の上の「若やか」「おぼどか」「たをたをと」といった態度や様子が、「あえか」という語に

よって総括的に評価されることである。

「心強し」は、靡かない、という寢覚の上の行為と関わる語である。しかし、男君は寢覚の上の「心強」さを認めながらも、結局は寢覚の上の本心を疑ってしまう。それは、帝によっても「心強」さとそぐわないとされていた、「あえか」な寢覚の上の外見が寢覚の上の危うさを感じさせ、男君の不安をかき立てるからだと考えられる。「あえか」は女君の可憐な弱い様子を表わす言葉であり、確かに外見的に弱さを印象づける。とはいえ、それがすぐさま「心強」くなく、男性に「なびく」女君像と結びつくわけではないだろう。「あえか」な女君は「なびく」ものだという前提が導き出されるには、先行作品における「あえか」との関わりがあるのではないだろうか。

ここで考えておく必要があるのが、「あえか」という語が、『源氏物語』成立以前の作品には見えないことである。『源氏物語』が十八例、『夜の寢覚』が九例、『狭衣物語』四例、『浜松中納言物語』六例という用例数を考えてみても、『夜の寢覚』が「あえか」という語をどのように物語において用いるかということ、参考にできたものは限られてくる。中でも、『夜の寢覚』の「あえか」の用例には、『源氏物語』の女三の宮に用いられる表現とよく似たものが見え、『夜の寢覚』が『源氏物語』の「あえか」の使い方を参照していたことは間違いない。

本稿では、「あえか」な女君として、夕顔と女三の宮の類似性に焦点を当てる。そのために、夕顔とよく似た「はかなげ」な女君とされる一方、「あえか」が全く用いられない浮舟に注目し、「あえか」の有無と「なびく」の関係について明らかにする。この三人の女君にどのように「なびく」が用いられているかを検討することで、「あえか」と「なびく」の関連性を明らかにし、『夜の寢覚』が『源氏物語』をどのように踏まえ、「あえか」な寢覚の上を造型していったかを提示する。

二 「なびく」女君としての夕顔

具体的な用例の検討に入る前に、『源氏物語』の「あえか」な女君の中でも夕顔を取り上げる理由について、もう少し説明を加える。

『夜の寝覚』の寝覚の上(中の君)は、臣籍降下した源氏太政大臣の娘である。にもかかわらず、本来の身分とは程遠い、但馬守三女と間違われたことがきっかけで、姉の婚約者であった男君と契りを結ぶことになる。二人の出会いの不運にも偶然が重なったように描かれており、中でも男君が乳母の見舞いに訪れていたという設定など、夕顔と光源氏をめぐる物語展開を踏まえていることが指摘されている。^⑤

男君は、寝覚の上を初めて間近に見て、「類なしと見ゆるよそめの月影よりも近勝りして、あえかにらうたげなるに、」(『夜の寝覚』巻一・三三二頁)と思う。その翌日、男君は宮の中将から但馬守三女の話聞き出し、次のように回想している。

「……秋の風に吹き乱る刈萱の上の露乱れ散りつらむ気色したりつるこそ」らうたさはまづ思ひ出でらるるに、

(『夜の寝覚』巻一・四四頁)

ここでは「あえか」という語は用いられていない。しかしながら、次に掲げる『源氏物語』帚木巻の用例を見れば、露が落ちてしまいそうなはかなげな様子は、「あえか」と通うものであるとわかる。

御心のままに折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見ゆる玉篋の上の霰などの、艶にあえかなるすきずきしさのみこそをかしく思さるらめ、いま、さりとも七年あまりがほどに思し知りはべなむ。なにがしがいやしき諫めにて、すきたわめらむ女に心おかせたまへ。過ちして見む人のかたくななる名をも立てつべきものなり

(帚木巻・①八〇頁)^⑥

これは、雨夜の品定めにおいて、左馬頭が浮気的な女との体験談を話した際の言葉である。喩えられる植物は「刈萱」と「萩」で異なるものの、どちらも女の様子を露が落ちてしまいそうなきさまに表わしている。『夜の寝覚』のこの場面における宮の中将与男君の会話は、雨夜の品定めからの影響が指摘されている。^⑦『夜の寝覚』は、おそらくこの左馬頭の発言も踏まえていたと考えられる。

金井利浩氏^⑧によれば、前に掲げた左馬頭の発言は、「夕顔の物語を粹取り規定するプレテクストのひとつ」であり、「あえか」な夕顔と関わる光源氏についての「予見的忠告」であるという。『源氏物語』では雨夜の品定めから夕顔との関係へ、『夜の寝覚』では寝覚の上との関係から宮の中将与との会話へ、と順序が反転している。このことを考えてみても、男君から寝覚の上への最初の印象として与えられた「あえか」には、『源氏物語』の夕顔の「あえか」な様子が関わっていると考えることができる。

さらに重視するのは、男君が寝覚の上の特徴として語った、「若やか」「おほどか」「たをたをと」「あえか」が、全て夕顔の特徴と一致することである。夕顔付きの女房であった右近が玉鬘と再会した際、夕顔と玉鬘を比べる場面を掲げる。

母君は、たたいと若やかにおほどかにて、やはやはとぞたをやぎたまへりし、これは気高く、もてなしなど恥づかしげに、よしめきたまへり。

(玉鬘巻・③一一七頁)

玉鬘の母である夕顔は、「たたいと若やかにおほどかにて」と、玉鬘の気品の高さに対比的に語られる。さらに、生前の夕顔の姿は、光源氏から次のようにも捉えられていた。

白き袷、薄色のなよかなるを重ねて、はなやかならぬ姿いとらうたげにあえかなる心地して、そこととりたててすぐれたることもなけれど、細やかにたをたをとして、ものうち言ひたるけはひあな心

苦しと、たたいとらうたく見ゆ。

(夕顔卷・①一五七頁)

「たをたをと」は、しなやかなさまを表わす語である。『源氏物語』において、「たをたをと」は三例しかない。その三例は、夕顔、玉鬘の中の君、浮舟の様子に用いられている。中でも、「あえか」とともに用いられている夕顔の例は注目に値する。

次に、夕顔が「なびく」女君として描かれていたことを確認する。

「げに、いづれか狐なるらん。ただはかられたまへかし」となつかしげにのたまへば、女もいみじくなびきて、さもありぬべく思ひたり。世になくかたはなることなりとも、ひたぶるに従ふ心はいとあはれげなる人と見たまふに、

(夕顔卷・①一五四―一五五頁)

右に掲げたのは、光源氏が身分を隠して夕顔のもとへ通っていた折の様子である。「女もいみじくなびきて、さもありぬべく思ひたり」と、夕顔が光源氏の言葉に対して従順に応じる様子が語られている。その様子を見た光源氏は、「ひたぶるに従ふ心はいとあはれげなる人」と、夕顔がひたすら自分に従う様子を好ましく思う。

この後、夕顔は物の怪によって亡くなる。夕顔の死後も、その従順な様子は光源氏の女性観に深く影響を与える。次に掲げるのは、夕顔の死後、右近に語った光源氏の言葉である。

「はかなびたるこそはらうたけれ。かしこく人になびかぬ、いと心づきなきわざなり。みづからはかばかしくすくよかならぬ心ならひに、女は、ただやはらかに、とりはづして人に欺かれぬべきがさすがにものづつみし、見ん人の心には従はんむあはれにて、わが心のままとり直して見んに、なつかしくおほゆべき」

(夕顔卷・①一八八頁)

「見ん人の心には従はんむあはれにて」と、前の「ひたぶるに従ふ心はいとあはれげなる人」と重なる夕顔の従順な様子が思い出されている。

光源氏は夕顔との関わりの中で、従順な女性の魅力に惹かれるのであった。

夕顔は物語において、わずかの間に亡くなってしまふ。しかしながら、娘の玉鬘の登場に伴い、その靡きやすい様子が再び語られる。次に掲げるのは、光源氏が若々しく育っている呉竹に親しみを感ず、玉鬘に和歌を詠みかける場面である。

御前近き呉竹の、いと若やかに生ひたちて、うちなびくさまのなつかしきに、立ちとまりたまうて、

「ませのうちに根深くうゑし竹の子のおが世々にや生ひわかるべき

思へば恨めしかべいことぞかし」と、御簾をひき上げて聞こえたまへば、

(胡蝶卷・③一八二―一八三頁)

ここで「呉竹」が登場することは、「ほどなき庭に、されたる呉竹、前栽の露はなほかかる所も同じごときらめきたり。」(夕顔卷・①一五七頁)と、夕顔の家に「呉竹」があつたことと関連づけることができ、夕顔と玉鬘が「呉竹」を通して重ねられていとされる。⑨「呉竹」の様子が「うちなびくさま」とあることを踏まえると、ここで「呉竹」を通して特に想起されるのは、光源氏に靡いていた夕顔の姿なのである。

さらに、光源氏は玉鬘に対して、自分に靡くように誘い掛ける内容の和歌を詠みかける。

「した露になびかましかば女郎花あらし風にはしをれざらましなよ竹を見たまへかし」など、ひが耳にやありけむ、聞きよくもあらずぞ。

(野分卷・③二八〇―二八一頁)

この時、「なよ竹を見たまへかし」と、風に靡くことで折れない、「なよ竹」を見習いなさいと言っているのである。ここでは「呉竹」ではなく、そのしなやかな性質を言う「なよ竹」であるものの、従順だった夕顔の姿が、

ここでも思い起こされると類推できる。

以上のように、夕顔の「なびく」様子は光源氏に強い印象を残し、光源氏の女性観に影響を与える。それは、夕顔の死後も光源氏の記憶にとどめられ、玉鬘の登場とともに再認識される。夕顔は、『源氏物語』において確かに「なびく」女君として描かれている。

三 「なびく」に自覚的な浮舟

浮舟には「あえか」は用いられない。そのため、「あえか」な女君が「なびく」という、夕顔のような描かれ方とは異なっている。しかしながら、浮舟については、実に六例もの「なびく」の用例が見える。以下、浮舟が「なびく」に自覚的であり、「なびく」に抵抗した女君であることを示す。これによって、夕顔とよく似た浮舟に「あえか」が用いられなかったことの意味を検証する。

浮舟の「なびく」の用例は、浮舟巻に集中しており、匂宮との関係から使われ始める。

女、いとさまよう心にくき人〔薰※稿者注。以下同〕を見ならひたるに、時の間も見ざらむに死ぬべしと思し焦がる人〔匂宮〕を、心ざし深しとはかかるを言ふにやあらむと思ひ知らるるにも、あやしかりける身かな、誰も、ものの聞こえあらば、いかに思さむと、まづかの上の御心を思ひ出できこゆれど、「匂宮」知らぬを、かへすがへすいと心憂し、なほあらむままにのたまへ。いみじき下衆といふとも、いよいよなむあはれなるべき」と、わりなう問ひたまへど、その御答へは絶えてせず、他事は、いとをかしくけ近きさまに答へきこえなどしてなびきたるを、いと限りなうらうたしとのみ見たまふ。

（浮舟巻・⑥一三〇頁）

『夜の寝覚』の「あえか」な寝覚の上造型

浮舟は、薰の落ち着いた様子を見慣れていたため、匂宮の情熱的なふるまいに触れ、深く想われていると感じる。このような状況を、「まづかの上の御心を思ひ出できこゆれど」と、腹違いの姉である中の君に対して申し訳なく思い、匂宮に対して素性を隠し通そうとする。ただし、「他事は、いとをかしくけ近きさまに答へきこえなどしてなびきたる」と、名のこと以外は匂宮に対して従順に応じている。

しかし、浮舟はこのまま単純に匂宮に靡くわけではない。薰が浮舟を訪れた際、浮舟は匂宮のことを思い出す。

そなたになびくべきにはあらずかしと思ふからに、ありし御さまの面影におぼゆれば、我ながらも、うたて心憂の身やと思ひつづけて泣きぬ。
（浮舟巻・⑥一四四頁）

浮舟は、匂宮との逢瀬で、薰とは異なる匂宮の魅力に感じ入ることもあった。しかし、「そなたになびくべきにはあらずかし」と、匂宮に靡くべきではないという理性がまず語られており、「なびく」に対して自覚的に対処しようとしている。

そのような浮舟の思いに反して、浮舟の傍に仕える右近と侍従は、浮舟が匂宮に心を移していると見る。右近は、右近の姉が二人の男と関係を持ち、初めの男が後からの男を殺してしまうという悲劇的な結末を迎えたことを浮舟に話し、薰と匂宮のどちらか一人に思い切るよう勧める。その時、「宮も御心ざしまさりて、まめやかにだに聞こえさせたまはば、そなたさまにもなびかせたまひて、ものないたく嘆かせたまひそ」（浮舟巻・⑥一七九頁）と、匂宮の愛情が深く誠実であるならば、匂宮の方に思い切れば良いと言う。さらに、匂宮に肩入れしている侍従も、「ただ、御心の中に、すこし思しなびかむ方を、さるべきに思しならせたまへ」（浮舟巻・⑥一八〇頁）と、やはり浮舟が匂宮に思いを寄せているという前提で話を続ける。

右近と侍従は以前、浮舟が後から届いた薫の手紙を開かず、先に届いていた匂宮からの手紙だけを見ていたため、「なほ移りにけり」(浮舟巻・⑥一五八頁)と確信していた。しかし浮舟は、二人の手紙を同時に開いて見るのは、いかにも多情な女のふるまいだと思ったため、匂宮の手紙を見続けていたのだった。このような誤解もあり、浮舟は先ほどの右近と侍従の話の次に否定的に聞く。

君〔浮舟〕、なほ、我を宮〔匂宮〕に心寄せたてまつりたると思ひてこの人々の言ふ、いと恥づかしく、心地にはいづれとも思はず、ただ夢のやうにあきれて、いみじく焦られたまふをばなどかくしもとばかり思へど、頼みきこえて年ごろになりぬる人〔薫〕を、今はともて離れむと思はぬによりこそ、かくいみじとも思ひ乱るれ、げによからぬことも出で来たらむ時、とつくづくと思ひるたり。まろは、いかで死なばや、世づかず心憂かりける身かな、かくうきことあるためしは下衆などの中にだに多くやはあなる、とて、うつぶし臥したまへば、

(浮舟巻・⑥一八一頁)

浮舟は、情熱的に執着心を示す匂宮に対して、「ただ夢のやうにあきれて、いみじく焦られたまふをばなどかくしもとばかり」思う一方、長い間頼ってきた薫に対して、もう別れてしまおうというつもりもなく、自分の気持ちとしては、匂宮と薫のどちらかに惹かれてるわけでもないのだという。さらに、都合の悪いことも起こらぬようにと思い、「まろは、いかで死なばや」と死に傾いていく。

ここで考えておきたいのは、浮舟の造型に夕顔が踏まえられているという指摘があることである。^⑩

「なびく」に注目してみると、夕顔は光源氏にただひたすら「なびく」態度だったのに対して、浮舟は「なびく」に自覚的であり、「なびく」に抵抗した末に死に傾いていったとも言える。薫と匂宮との関係に思い悩

み、死を決意した浮舟に対して、次のような語り手からの批評がある。

見めきおほどかに、たをたをと見ゆれど、気高う世のありさまをも知る方少なくて生ほしたてたる人にしあれば、すこしおずかるべきことを思ひ寄るなりけむかし。

(浮舟巻・⑥一八五頁)

「見めきおほどかに、たをたをと」した、おっとりとして、もの柔らかな外見にもかかわらず、死を決断した浮舟の大胆さが、その出自の低さによって説明されている。ここで、『源氏物語』中で用例が少なく、夕顔と共通する「たをたをと」が用いられていることは注目できる。夕顔と同じく頼りなさげで弱々しい形容がなされるにもかかわらず、浮舟には夕顔の特徴である「あえか」が全く用いられない。これは「あえか」が、夕顔の「なびく」と、浮舟の「なびく」を描き分ける上で、重要な言葉だったからなのではないか。松村誠一氏は、浮舟と夕顔の類似性が描かれることについて、「らうたし」「らうたげなり」と、「心強さ」に着目し、次のように論じている。

恋の相手の薫や匂宮のみならず、異腹の姉の中君からも「らうたし」と思われ「らうたげなり」と見られる浮舟の、たよりきつたよわよわしい性格を、あのはかなびた夕顔をすぐ思い出させるような手を尽くして、くりかえし読者に印象づけておいて、ひとたび救い出されて生きかえってからの浮舟については、実の娘に対するほどの親愛の情をもって接する尼君にさえ、ついに一度も「らうたし」と思われたり、「らうたげなり」と見られたりすることのない「心強さ」を一貫して描き出しているのである。

松村氏は、「あえか」については言及していない。しかしながら、浮舟と夕顔の違いが「心強さ」にあるとするならば、「あえか」の有無がその差を決定づける要因の一つであると考えerことは可能である。さらに、「心強く、この世に亡せなれと思ひたちし」(手習巻・⑥二九六頁)のように、

浮舟がこの世から去ろうとしたことが「心強」い決意の固さとして語られていることを考えれば、その原因ともなった「なびく」への抵抗と「心強さ」も無関係ではあるまい。

なお、松村氏より後に論じられている夕顔にも意志の強さがあったとする説^②を否定するつもりはない。ここでは、「心強し」という語が浮舟には見えて夕顔には用いられないこと、「なびく」に対する両者の描かれ方の違いがあることから、浮舟の方により一層、その意志の強さをはっきりと見ることができていることを押さえておく。

浮舟から『夜の寢覚』への影響については、池田和臣氏が、『夜の寢覚』の物語第一部に多くの表現的類似が見えることを指摘し、「『寢覚』の〈女の物語〉としての深化をうながす主題的力源としては浮舟物語こそがふさわしく、それが『寢覚』第一部の構想力をささえる根幹をなしているといえよう。」^③と重視している。また、加藤玲氏「おほどか」な女君―浮舟から寢覚の上へ^④は、『源氏物語』中で「おほどか」が最も多く用いられる浮舟の造型が、寢覚の上へ継承されているとする。こうした浮舟との影響関係を考えれば、「あえか」な夕顔のようにはかなげでありながら、「心強さ」を兼ね備えるという浮舟の造型から、寢覚の上の「あえか」で「心強」く靡かないという造型が導き出されたとと言えるのではないだろうか。

四 「なびく」女君と見なされる女三の宮

『源氏物語』の女三の宮の「あえか」の用例は、『夜の寢覚』の「あえか」の用い方に最も色濃く影響を与えている。次に掲げるのは、女楽において光源氏の視線に沿って語られる女三の宮の様子である。

宮の御方をのぞきたまへれば、人よりけに小さくうつくしげにて、

『夜の寢覚』の「あえか」な寢覚の上造型

ただ御衣のみある心地す。にほひやかなる方は後れて、ただいとあてやかにをかしく、二月の中の十日ばかりの青柳の、わづかにしだりはじめたらむ心地して、鶯の羽風にも乱れぬべくあえかに見えたまふ。
(若菜下巻・④一九一頁)

やはらぎなまめいて、

(『夜の寢覚』巻三・二五六頁)

ここで注意しておきたいのは、『源氏物語』でも三例しかなかった「たを」とが、この女三の宮との重なりが濃厚な表現とともに用いられていることである。ここから、『夜の寢覚』は、「たをたを」と女三の宮の印象を関連づけて捉えていた可能性が考えられる。女三の宮は光源氏と対面した際、「若やか」「おほどか」とも語られている。『夜の寢覚』の男君が寢覚の上の昔からの印象として語った、「若やか」「おほどか」「たをたを」と「あえか」は、女三の宮の特徴ともほとんど重なるのである。加えて、点線部「二月の中の十日ばかりの青柳」に類似する表現も、帝から見た寢覚の上に用いられている。

……荒立たせたまふに、やうやう生き出でつる命、絶えぬる心地して、このごろ「二月二十五日」のしだり柳の、風に乱るるやうにて、さすがにいと執念くて、靡くべくもあらず。

(『夜の寢覚』巻三・二八〇―二八一頁)

寢覚の上は大皇の宮の計画によって、帝に捕えられ、言い寄られる。寢覚の上は、帝の苛立つ様子に命も絶えてしまいそうに感じ、柳が風に乱れるように弱々しいものの、強情であり、帝を拒み通すのである。

『源氏物語』の女三の宮の表現には、『河海抄』では「鶯の羽かせにな

ひく青柳のみたれて物をおもふころ哉^⑮（具平親王）が引かれている。この和歌で詠まれているように、柳は風に靡き、乱れるものである。『後拾遺和歌集』にも、「あさみどりみだれてなびくあをやぎのいろにぞはるのかげもみえける」^⑯（巻一・春上・七六・藤原元真）と、「みだれてなびくあをやぎ」を詠む和歌がある。

しかし、寢覚の上は柳のように弱々しく見えながらも、「靡くべくもあらず」と語られる^⑰。寢覚の上の靡かないという態度は、その外見の弱々しさとはそぐわないものとして特筆されているのである。

寢覚の上は女三の宮のような外見をしているけれども、靡かないとされる。それでは、女三の宮の「なびく」の描かれ方についてはどうであろうか。

光源氏は、夕顔が自分に「なびく」様子であることを、好ましく思っていた。しかし、自分の理想通りに紫の上を育て上げた今、「なびく」女君に対する光源氏の捉え方も異なる。

ただ聞こえたまふまに、なよなよとなびきたまひて、御答へ^⑱なども、おぼえたまひけることは、いはけなくうちのたまひ出でて、え見放たず見えたまふ。昔の心ならましかば、うたて心劣りせましを、
（若菜上巻・④七四頁）

「なよなよとなびきたまひて」と、女三の宮は光源氏の言うことに対して素直に従う。それに対し、光源氏は物足りなく、否定的に捉えている。夕顔との違いで言えば、女三の宮の場合、柏木との関係でも「なびく」が見える。

かかる人に並びて、いかばかりのことにか心を移す人はものしたまはむ、何ごとにつけてか、あはれと見ゆるしたまふばかりはなびかしきこゆべき、と思ひめぐらすに、いとどこよなく御あたりはるかなるべき身のほども思ひ知らるれば、胸のみふたがりてまかだたま

ひぬ。

（若菜上巻・④一四五頁）

女三の宮を垣間見した柏木は、女三の宮に執着を募らせていく。光源氏と自身を思い比べ、女三の宮が光源氏以外の男に気移りするはずがないと思いつつも、「あはれと見ゆるしたまふばかりはなびかしきこゆべき」と、せめて「あはれ」と思わせる程度には女三の宮を靡かせる方法がないかと思悩む。こうして女三の宮からの「あはれ」を求める柏木は、女三の宮付きの女房である小侍従に手引きさせて女三の宮のもとに忍び込み、ついに密通に至るのである。

ただし、柏木の視点から女三の宮が靡いたとする記述や、女三の宮自身が柏木に靡いたと自覚する場面は見られない。しかし、女三の宮の密通は、後の密通を引き合いに出されて語られ、「なびく」と結びつけられていく。

密通発覚前、光源氏に密通を知られるのを恐れる女三の宮の様子が、語り手から語られる。

限りなき女と聞こゆれど、すこし世づきたる心ばへまじり、上はゆゑあり、兎めかしきにも従はぬ下の心添ひたるこそ、とあることか
かることにうちなびき、心かはしたまふたぐひもありけれ、これは深き心もおはせねど、ひたおもむきにも怖じしたまへる御心に、
ただ今しも人の見聞きつけたらむやうにまばゆく恥づかしく思さるれば、明かき所にだにえぬざり出でたまはず。いと口惜しき身なり
けりとみづから思し知るべし。
（若菜下巻・④二三〇頁）

柏木が「帝の御妻をもとり過ちて、」（若菜下巻・④二三〇頁）と、后との密通の場合を思い浮かべるのと対応するように、「限りなき女」と、后のような高貴な女性が引き合いに出される。その場合、「上はゆゑあり、兎めかしきにも従はぬ下の心添ひたるこそ、とあることかかかすることにうちなびき、心かはしたまふたぐひもありけれ」と、表面上は奥ゆかしく

おっとりとしていても、心の底では従わない深い考えがある人こそ、他の男性に靡き、心を通わせることもあるだろう、と語られる。一方、女三の宮の場合、「深き心もおはせねど、ひたおもむきにも怖じしたまへる御心」と、深い考えはなく、ただひたすら恐ろしく思っている様子である。

密通を知った光源氏の心中でも同様に、後の密通が引き合いに出される。

帝と聞こゆれど、ただ素直に、公さまの心ばへばかりにて、宮仕のほどものすさまじきに、心ざし深き私のねぎ言になびき、おのがじしあはれを尽くし、見過ぐしがたきをりの答へをも言ひそめ、自然に心通ひそむらむ仲らひは、同じけしからぬ筋なれど、寄る方ありや、わが身ながらも、さばかりの人に心分けたまふべくはおぼえぬものを、といと心づきなけれど、
(若菜下巻・④二五五頁)

帝からの寵愛が薄く、表向きお仕えしているだけの宮仕えでは、臣下からの熱心な口説きに惹かれ、自然と心を交わすこともあるだろう。その場合は、同じ密通と言っても許される余地もあるものの、女三の宮が柏木程度の男に心を分けたのは不愉快だと光源氏は思う。

注目したいのは、語り手から出された高貴な女性の例で、「心かはしたまふたぐひ」とあり、光源氏が語った後の例も、「自然に心通ひそむらむ仲らひ」とあり、密通した女性が相手の男性と「心」を通わしていることとされることである。それと対比的に語られる女三の宮は、ただただ恐ろしく思っており、柏木に心を寄せたという記述は見られない。しかしながら、光源氏からは、柏木に「心分け」たのだとされ、女三の宮の「心」を無視したような形で、靡いたのだと見なされてしまう。

『夜の寝覚』の男君は、寝覚の上が宮中を逃れ出た後でさえ、「かくてのみ逢はざらむほどは、さりととも、うち見て涙ぐまるる節々もありなむ

『夜の寝覚』の「あえか」な寝覚の上造型

かし。」(前掲、『夜の寝覚』巻四・三五六頁)と言い、「これは、世の聞き耳のうはべをもて離れて、心のうちには、あはれともかたじけなしとも、身にしてみても思ひ知り、うちながめむこそ、世にわびしく、胸痛かべけれ」(巻四・三五六頁)と、寝覚の上は世間体を気にして表面上帝を拒み、内心では帝に惹かれているのだろうと疑う。女君の心とは違った方向に靡いている、と男君から見なされるのは、『源氏物語』において、女三の宮が本心とは異なり、柏木に靡いたと光源氏から見なされるのと重なる。

以上のように、『源氏物語』の女三の宮は、光源氏に対して従順な「なびく」女君として語られながらも、密通に際しては、心を動かした記述は見られず、明確に靡いたとは語られない。このような女君の本心と男君からの捉え方のずれについては、『夜の寝覚』の寝覚の上の本心と男君からの捉え方のずれとも重なっている。

五 夕顔からの系譜を継ぐ寝覚の上

以上確認してきたように、『夜の寝覚』における「あえか」な女君が靡きやすく、男君の不安をかき立てる、といった発想は、夕顔や女三の宮という「あえか」な女君が「なびく」女君として描かれていることとながると考えられる。「若やか」「おほどか」「たをたをと」した態度や様子を「あえか」という語で集約する男君の寝覚の上の捉え方は、夕顔や女三の宮の特徴を意識して書かれたものであったと言つてよいだろう。

「あえか」が用いられない浮舟は、靡きやすい女君としては造型されていない。しかし、『源氏物語』中で最も「なびく」について自覚的に対処した女君であったと言える。

従つて、『夜の寝覚』は夕顔、女三の宮、浮舟というそれぞれの女君がどのように描かれているのかを踏まえた上で、寝覚の上の「あえか」で

「なびく」と見なされる外見と、「あえか」らしからぬ「心強」く「なびく」に抵抗する内面を作り上げていったことが考えられる。

夕顔と浮舟は、『更級日記』にも並べて語られており、平安時代後期にはすでにその類似性が認められていたようである。『夜の寢覚』の作者を孝標女に断定するつもりはないが、『狭衣物語』の飛鳥井の女君が夕顔と浮舟を用いて造型されていることを考えれば、『夜の寢覚』がそのような夕顔と浮舟の特徴を合わせた人物を造型しても何ら不思議ではない。

寢覚の上が男君との出会いで身分の低い女性と間違われたことは、「我ながらあやしく鎮めがたきを、人の程をこよなき劣りと思ふに、あなづらはしく、」（『夜の寢覚』巻一・三〇頁）と、男君の自制心を崩させた要因にもなっていた。誤解が解けた後もなお、寢覚の上は大君や女一の宮といった男君の正妻に比べて劣位に置かれるなど、身分の低い夕顔や浮舟のように不安定な立場にあり、帝や老閨白など複数の男性との関係にも悩まされる。しかし、夕顔と浮舟では、太政大臣の娘であり、閨白の妻となった寢覚の上とは身分的に釣り合わない。そうした中で『夜の寢覚』が注目したのは、夕顔のように「あえか」でありながら、高貴な出自を持つ女三の宮だった。『夜の寢覚』は夕顔と女三の宮の共通する特徴を巧妙に掬い取り、夕顔と浮舟という広く認められた系譜に女三の宮を組み込むことで、「あえか」と「心強し」、あるいは本来の出自の高さと身分の低い女性のような境遇という二面性を描き出した。寢覚の上は、理想性を保ちながらも、なお不如意な男性との関係に巻き込まれるべく造型されていると言える。

注

- ① 「紫の上と寢覚の上―成長する女主人公について―」『新編日本古典文学全集 夜の寢覚』（小学館、一九九六年）六頁。

② 『夜の寢覚』の引用は、「新編日本古典文学全集」による。以下同じ。なお、傍線等は全て稿者による。

③ 吉村研一氏「あえか」について（『源氏物語』を演出する言葉』勉誠出版、二〇一八年 初出『源氏物語』において「あえか」という言葉が果たした役割』『学習院大学大学院日本語日本文学』一〇、二〇一四年三月）。なお、『紫式部日記』にも「あえか」は三例ある。

④ 『狭衣物語』と『浜松中納言物語』は、『新編日本古典文学全集』に見える用例数を示した。

⑤ 「新編日本古典文学全集」二六頁頭注、赤迫照子氏「『夜の寢覚』における夕顔物語引用の方法―身分違いの恋―という装い―」（『更級日記の研究―孝標女の世界を考える』新典社、二〇〇四年）など。

⑥ 『源氏物語』の引用は、「新編日本古典文学全集」による。分冊を丸囲みの算用数字で頁数の前に示した。以下同じ。なお、傍線等は全て稿者による。

⑦ 鈴木弘道氏「寢覚物語の基礎的研究」（塙書房、一九六五年、二四七頁）など。

⑧ 「あえか」の系譜と機略―源氏物語の〈女と男〉、その一脈―（『古代中世文学論考会編『古代中世文学論考』第四集、新典社、二〇〇〇年）。

⑨ 「源氏は、若やかな呉竹の姿に、若き日五条の家で夕顔とともにながめた呉竹のことを思い出す。（中略）夕顔と玉鬘のイメージが重なる。」（『新編日本古典文学全集』③一八二頁頭注八）など。笹生美貴子氏「『源氏物語』に見られる「呉竹」―『夕顔・玉鬘母子物語』の伏線機能―」（『語文』一二四、二〇〇六年三月）が詳しい。

⑩ 今井源衛氏「浮舟の造型―夕顔・かぐや姫の面影をめぐって―」（『源氏物語の思念』笠間書院、一九八七年 初出『文学』五〇―七、一九八二年七月）、吉井美弥子氏「浮舟物語の二方法―装置としての夕顔」（『読む源氏物語 読まれる源氏物語』森話社、二〇〇八年 初出『中古文学』三八、一九八六年十一月）など。

⑪ 「浮舟―「らうたさ」と「心強さ」―」（『成蹊國文』創刊号、一九六八年一月）。

⑫ 今井源衛氏「夕顔の性格」（『源氏物語の思念』笠間書院、一九八七年

初出『平安時代の歴史と文学』吉川弘文館、一九八一年。

⑬ 『源氏物語』の水脈―浮舟物語と『夜の寢覚』―（『源氏物語 表現構造と水脈』武蔵野書院、二〇〇一年 初出『国語と国文学』六一―一一、一九八四年十一月）。

⑭ 『相模国文』二九、二〇〇二年三月。

⑮ 玉上琢彌氏編『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九六八年）四八四頁。

⑯ 『新編国歌大観』第一卷（角川書店、一九八三年）。

⑰ 赤迫照子氏『夜の寢覚』の「鶯」―『源氏物語』引用の方法の一断面―（『古代中世国文学』一六、二〇〇〇年十二月）でも、この場面における寢覚の上と女三の宮の影響関係について取り上げられている。赤迫氏の論では、「ただし、女三宮を想起させるといつても未熟・脆いといった負の部分はおちこまれていない。」とするが、帝によって「あえか」と捉えられている点から、危うさを感じさせる弱々しさが付与されていると考える。

⑱ 「光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなくあさまし。」（『新編日本古典文学全集』二九九

頁）とある。

⑲ 大槻修氏「はかなげな女の悲恋の物語」（『中世王朝物語の研究』世界思想社、一九九三年 初出『甲南女子大学研究紀要』創立十周年記念号、一九七五年十一月）は、夕顔・浮舟のような「はかなげな女の悲恋」を描く物語が、『狭衣物語』以降、さまざまな創意工夫を交えて作られていたとする。

〔付記〕

本稿は、第六十二回立命館大学日本文学会大会での口頭発表「『夜の寢覚』と夕顔・浮舟についての一考察―「なびく」女君をめぐる―」（二〇一八年六月十日、於立命館大学）をもとに、大幅に加筆修正したものです。ご教示を賜りました先生方に深くお礼申し上げます。

（本学大学院博士後期課程）